前橋文学館報

萩原朔太郎記念　水と緑と詩のまち

No.31　2009.9

これからの催し物案内

●第17回萩原朔太郎賞受賞者プレ展
開催中～11月29日（日）

●第13回若い芽のポエム入賞作品展
10月3日（土）～11月29日（日）

●特別企画展「続・沈黙の語り部―まえばしの文学碑―」
10月10日（土）～11月23日（月・祝）

●第95回アートステージ「文学碑の拓本をとろう」
11月21日（土）　14：00～　宝禅寺（上泉町）
申込締切　11月10日（火）

●「子どもたちが描いた「朔太郎詩」の絵の展覧会」（以下仮称）
12月5日（土）～平成22年1月24日（日）

●前橋文学館写真展「モノクロームな世界」
平成22年2月13日（土）～3月7日（日）

●「収蔵資料展」
平成22年3月中旬～4月中旬

●その他、企画展、文学館講座、アートステージ、共催事業を予定

編集後記

この夏、小学生を対象に、日本語の一番短い定型詩である俳句の講座を開催しました。講師の水野さんは、やさしい言葉で奥深い世界を語ってくださり、子どもたちも熱心に水野さんの言葉に耳を傾け、俳句を作りました。

俳句の入門としてはもちろんですが、言葉というもの、表現ということを考える上でも、大変意義深いお話でしたので、今回の特集といたしました。皆さまにお読みいただければ幸いです。（ま）

■前橋文学館利用案内

開館時間■午前9時30分～午後5時（朔太郎展示室・近代文学展示室・企画展示室・資料閲覧室）
■午前9時～午後9時（ホール・オープンギャラリー・研修室）
休館日■月曜日（休日の場合は開館し、翌日休館）、年末年始その他規則等で定める日

前橋文学館報　第31号
2009年9月30日発行
発行　萩原朔太郎記念　水と緑と詩のまち前橋文学館
〒371-0022 群馬県前橋市千代田町三丁目12-10
TEL 027-235-8011　FAX 027-235-8512
http://www15.wind.ne.jp/~mae-bun/

■ message

文学館入館者　五十万人達成

館長　須川　武則

今年の四月に、前橋文学館の館長に就任して、半年が過ぎようとしています。

文学館という職場に勤務するに当たり、今までの職歴において経験したことがないため、不安を抱いてのスタートとなりましたが、おかげさまで職員を始め、関係者のご支援・ご協力をいただき日々勤めさせていただいているところです。

さて、水と緑と詩のまち前橋文学館は、郷土出身やゆかりの文学者の業績を顕彰し、貴重な資料を公開することと、幅広い芸術文化活動のひとつの拠点として活用することなどを目的に平成五年九月三日にオープンし、本年九月三日で十六年が経過しました。

その間、文学に関する市民の理解と関心を深め、芸術文化の向上を図りながら、市民と歩む文学館を目指して事業を進めている中、去る七月十二日に入館者五十万人を達成することができました。

五十万人目となりましたのは、埼玉県春日部市からお越しの有馬稔さんご夫婦で、「いつかは行きたかった文学館に、立ち寄った日に五十万人目になった」ことを感激しておられました。当日はくす玉を割って節目を祝った後、高木政夫前橋市長から五十万人目の認定証と記念品を、また関口和敏前橋市施設管理公社理事長からは花束が贈られました。

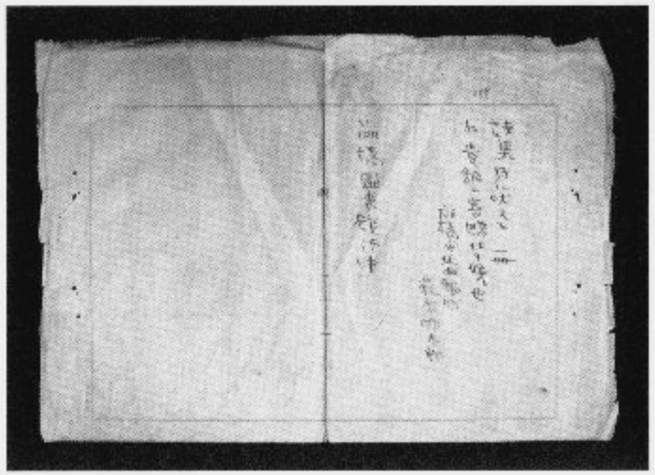
入館者が五十万人という節目を迎えた今、ご来館いただきました多くの皆様に心から感謝申し上げますとともに、この機会に文学館の役割を改めて検証・再確認し、文学館としての使命を果たすため、またこれからも、皆様の活動の場として多くの方々に親しまれ、気軽に訪れることができる文学館でありますよう、職員一丸となって新たな一歩を踏み出してまいりたいと考えておりますので、今後とも皆様のご指導・ご協力をお願い申し上げます。

目次

■資料は語る……1
■特集　第25回文学館講座「俳句を遊ぼ。―作って書いて夏休み！―」より
「俳句ってナニ？　作ってみよう！」　水野 真由美……2
受講生の俳句……18
■ Report
●4月～9月の事業……20　●広瀬河畔日録（抄）……20　●新収蔵資料の紹介……23
■学芸員の窓……24
■群馬文学情報……25
■友の会から……25
●これからの催し物案内　●編集後記／前橋文学館利用案内

■表紙　朔太郎通りと文学碑
平成18年、萩原朔太郎生家跡前の、群馬県庁と国道17号を結ぶ道が朔太郎通りと名付けられた。手前は第12回萩原朔太郎賞受賞記念の平田俊子詩碑、通りの向こうに見えるのは萩原朔太郎生家跡の碑。

資料は語る



萩原朔太郎『月に吠える』寄贈状

詩集　月に吠える　一冊
右　貴館に寄贈仕り候也
前橋市北曲輪町
萩原朔太郎
前橋図書館御中

（文房堂製原稿用紙にペン書き）

萩原朔太郎が大正六（一九一七）年二月に刊行した第一詩集『月に吠える』の、前橋市立図書館への寄贈状。日付は書かれていないが、市立図書館の日誌によれば、朔太郎は大正六年三月九日に『月に吠える』を寄贈している。書類として綴られていたが、のちに額装され、図書館内に掲げられていた。

市立図書館は大正五年に開館。場所は曲輪町甲百七番地（現在の大手町二丁目、日本銀行前橋支店敷地内）、朔太郎生家の南西、すぐそばにあった。

第25回文学館講座「俳句を遊ぼ。―作って書いて夏休み！―」より

「俳句ってナニ？　作ってみよう！」

水野 真由美

平成二十一年八月六日・七日、第25回文学館講座「俳句を遊ぼ。―作って書いて夏休み！―」が開催されました。小学生を対象に、俳人の水野真由美さんと図案家の永井貴美子さんを講師に迎え、一日目「俳句ってナニ？　作ってみよう！」、二日目「俳句を書くゾ～!!　お字書き大会」と称し、俳句を実作し、墨書して作品に仕上げました。その中から、一日目の様子と、受講生の作品を紹介します。

言葉を遊ぶ

こんにちは。

「俳句を遊ぼ。」っていうテーマで、今日は夏休みの企画です。このチラシの怪しいほほえみが私で、水野真由美です。よろしくお願いします。あそこにいる人が、明日のお字書きのときに相談に乗ってくれたりします。永井貴美子さんです。

今日はこれから俳句ってなんだろうという話をして、そのあと短い時間ですけれど広瀬川の方に行ってみたいと思います。川岸を歩きながら俳句の材料を、まあネタ探しというか、みんなで材料を拾って歩きます。で、そのときには、ぜひ自分が見つけたものを私やほかのお友だちにも教えてください。

それからまたここに戻ってきて、俳句を作ります。最終的には二句を選ばせてもらえたらいいなって思ってます。その前にいっぱい作れる人は作ってもらって、それが今日の目標。一日目はとにかく俳句を作る。

明日はね、来るときに、あの帰りながらでもいいですから俳句作ってきてください。で、筆と墨汁でお字書きするのは一句だけです。どの作品を実際に書くかは来たときに決めましょう。その一句が決まったら、自分の俳句ってどんな俳句なのか、作品をそれぞれが声を出して読んでみる。自分でもう一回、読み直すってこと。そんでもって、ここに紙が、三角のとか四角くて大きいのとか、細ながーいのとか、いろんな紙がありますから、どれかを選んで明日、書き上げる。これが二日間の予定であります。

で「俳句を遊ぼ。」っていうテーマですけれども、じゃあ俳句っていうのは何じゃいな。ここに「五・七・五」って書きましたけど、たとえば「こんにちは」、これで五つの音ですね、五音。おなじように七音があって、最後にまた五音があって、これを足して十七音の組み合わせ、つまり三つのパーツからできている十七音のかたまりが俳句ということになります。

で、そのときどきの季節をあらわす言葉、あるいは何百年、千何百年、長い時間の文学の歴史のうえで、たとえば悲しいとかうれしいとかっていうイメージを持っている季節の言葉を季語といいます。それを入れる俳句もあるし、入れない俳句もあります。

とにかく何よりもまず、俳句は言葉で作ります。言葉っていうのは、今のところ、人間が使っているものなんですね。クジラなんかで声を言葉のように、やり取りをしている動物がいるんじゃないかっていう研究もあるらしいけど、基本的には私たち人間が使っている道具です、言葉は。

だから、その言葉を面白がるっていうことは、やっぱり人間を面白がるっていうことなんだと思います。今回の「俳句を遊ぼ。」というのは言葉を遊ぶっていうことだと思うし、それは人間を面白がるってことだし、とにかく面白がる。遊ぶっていうのは面白いって心が動くことなんで、心を動かして俳句を作っていけたらいいなと思います。

俳句のリズム

このプリントがみなさんのところにいっていると思います。で、一年生から六年生まで今回参加してくれているのかな。それぞれの学年によって使っている漢字が違うと思うので、一応全部にルビを、この漢字はこういうふうに読みますという読みがなのことですね。全部の字に読みがなをふって、みなさんがご自分でも読めるようなプリントにしてあります。今じゃなくてまたあとでもいいし、今、話を聞きながら読んでもいいけれど、こんなことを私は思ってますという俳句についてのプリントです。

俳句のさっき言った五・七・五、その五音とか七音って何なんだろう。それはリズムなんですね。言葉にリズムがあって、こう、気持ちがよくなる。たとえば交通標語なんかに使われる「手をあげて横断歩道渡ろうよ」は、なんかこう、口ずさみやすい、覚えやすい。そんなリズムが五音とか七音になります。

そういう五音とか七音がどうして俳句のリズムになるのかっていったら、この音の数っていうのは、たとえばここが床ですね。で、「床をたたく」とか「床に」とかいうふうに、ある名詞にそれをどうしたとか、それが好きだとかっていうのをくっつけて、意味のあるひとかたまりを作れる器としての五音なんですね。七音になると、もうちょっと長く、そこにも一つ何かを入れられるっていうかたまりになります。俳句にルールっていうのがあるとしたら、この五・七・五というリズムになります。

プリントに、「ふるいけや／かわずとびこむ・みずのおと」っていうのと「おしりから・おちてくるねこ／きりのはな」っていう作品がありますけれど、この五・七・五っていう三つのパーツは、ただこう並んでるだけで俳句になるわけではないんです。基本的に十七の音が一つのかたまりに分かれます。だから「ふるいけや」で一つのかたまりで、「かわずとびこむ・みずのおと」がもう一つのかたまり。つぎの句だったら「おしりから・おちてくるねこ」と「きりのはな」です。情景とか何が起きてるかが分かるのが長いひとかたまりで、そのひとかたまりがどんな世界なのか、うれしいのか悲しいのか、楽しいのかっていうのを教えてくれるのが残りの五音です。

基本的には五と七・五か、五・七と五か、そういう組み合わせで、短いけど何かを伝えることのできる形になっています。その中にたとえば五よりも言葉が多くなるっていうのもあるし、それから少なくなったり、それぞれの都合で言葉が、さっき言った言葉の持っているリズムを壊さない範囲で伸びたり縮んだりもします。そういう特別ルールもあります。

言葉の贈り物

じゃあそれでどんなことに注意して俳句って作るんだろう。

俳句は言葉で作られるって最初に言いましたけど、言葉にして気持ちを書いても心のなかで思っていることって、瞬一瞬、変わったりするんだよね。コップの水を飲んで、冷たいとかおいしいと思ったり、お水じゃなくてコーラだったらよかったのにと思ったり、あるいはコップがきれいだなとか、コップに透けてる向こうがきれいだとか、人はいろんなことを思うんだよね。その一瞬一瞬に何を思っているかっていうのは、こう流れていっちゃうんですよ。書くことでその流れを、感じてるいろんなことをピッて書き留める。言い留めてあげる。ああコップの水で、こんなことを感じたんだっていうのが、自分の目にも見えるようになります。そうすると書かなければ見えなかった自分の内側の心、気持ちが見えるようになります。そういうふうにして、言葉っていうのは自分の中にある何かを外に出すものなのね。

そうするとそれは自分から自分にあげるプレゼントだし、自分から誰かに、つまり読んでくれる人にあげる言葉で作ったプレゼントともいえるんですね。だからお誕生日だとか、あるいは母の日、父の日だとか、いろんなときに、誰かのことを思って、「ああ、あの人に何かあげたいな、喜ばせたいな」って贈り物を選ぶけど、それは買ったりするだけじゃないよね。自分の気持ちを見える形にすることだよね。それがたとえば道ばたの猫じゃらしで作った花束でも、何でもいいんだよね。で、そういう心をこめた自分への、誰かへの言葉の贈り物、それが五・七・五っていう十七音の形で自分の体から外に出ていく。たぶん、そういうものが俳句って呼ばれるのかなって思います。

何を書いても自由

で、何を書くんだと。五・七・五っていう言葉のかたまりを作るってことはわかったけど、じゃあ何を作るのが俳句なんだろうって。ここにも書きましたけれど決まったテーマはありません。まったくないです。俳句には形のルールはあるんだけど、心のルールはないんです。そこが本当にこう、自由なんだ。何を書いてもいいんです。

普段、それぞれのうれしいとか悲しいとか、いっぱいあると思いますけど、一人の思い出もあると思うし、家族や友だちのこと、飼ってる生き物のこと、学校でのこと、旅行のこと。その日その日の空の色であったり、木のこと、花のこと。いろんなものを俳句にしようと思ってください。食べものだって何だって俳句になります。今日このあと、実際に外に出て木や川とか、橋とか、草、虫やいろんなものを見ながら、俳句の材料を一緒に探しましょう。何が俳句になるのかっていうのは、作ろうとして分かることなんで、こんなものは俳句にならないとか決めつけないで、さっき言ったように、面白いと思うもの、心が動くもの何でもいいんです。そういうのをこれから探しに行きます。

それから今日、文学館のさちよさんがもってきてくれたんですけど、これセミの抜け殻です。たとえば普通、こんなふうにセミの抜け殻って言うけれど、俳句のほうの季節の言葉で空蟬（うつせみ）っていう言い方もあります。字は「空（から）」、空（から）っぽの空、お空（そら）の空に、セミを漢字で書いて空蟬っていうふうにも言います。これは『源氏物語』っていう、むかーしむかしの、世界で一番最初に作られたんじゃないかっていう長い物語にも出てくる言葉です。ただのセミの抜け殻なんだけれど、文学のうえでは空っぽとかさびしいとかのイメージも持っています。

今日、見るものだけが俳句になるんじゃなくて、大昔のことも昨日のことも、去年のことも、思い出の中にも俳句になることやものはいっぱいあります。

名前の力

じゃあ、今度はどう書くかっていうこともありますね。で、書き方のコツ、コツってわかるかな？　ちょっとした、うまくいく方法っていうんですかね。悲しい回り道をしないというのかな。そういうのがあって、それはなるべく具体的に書くっていうこと。具体的っていうのは、ここにもあるけど「きれいな花」の「きれい」には、たとえば大きくて豪華なきれいもあります。それから一つの花がこんなちっちゃくて、それがぷにょぷにょぷにょっていうきれいもあります。どんな「きれい」なのかっていうのをちゃんと見て書かないと読む人にも伝わらない。それから自分たちもきれいっていう言葉だけで、ある花を本当に覚えているかっていうと、なかなかそうじゃないんだよね。ただ「夏休みにきれいな花を見た、何月何日きれいな花を見た」というだけでは、来年の八月にその日記とか俳句を読んでも、

なかなか思い出せない。自分はその花のどこに一番ひかれたのか、それをちゃんと書くこと。「ちゃんと」が具体的っていう意味かなあと思います。

ここにありますけど、きれいな花の、まずその種類。朝顔だとか、おしろい花だとか、あと、キュウリ、ナスは野菜の花だけど、そういう名前ですね。ものの名前っていうのは、まあ植物の名前は人間がつけたんで、バラは自分がバラだと思って咲いているわけじゃないんですけど、ほかのものとは違うっていうことが分かるのが名前です。

私はここに「まゆみ」って書いてあります。ほかにも「まゆみ」っていう人はこの世にいっぱいいます。かずきくんという名前の人もいっぱいいると思うんです。でも今ここで、こうやって一緒にこの部屋で床に座っていて、あんな顔をしているかずきくんは、かずきくんだけ。で、こんな顔で、ここに座ってしゃべっているまゆみくんは、私だけ。そういうふうに、ほかのものに紛れない。だれ？　もりちゃん。だれ？　しゅんくん。だれ？　まさゆきくんっていうふうに、ほかの何かと紛れていかないための手掛かりの一つが名前です。

だからバラっていったら、ほかの花とバラを区別します。名前には、そういう仕事があるんですよね。

そうするとただのきれいな花じゃなくて、バラっていう名前を覚えて、その名前と花そのものが一緒になると、自分の心の中でいつでもバラを思い出すことができます。バラっていう名前を口ずさんだだけで、その形とか色とか匂いが自分の心の中によみがえってきます。名前ってすごくそういう大事な力があります。

木にも名前があります。窓からパッて見たら、どれも全部、川岸にあるただの木だけど、それぞれが桜の木であったり、榎っていう木であったり、いろんな木があります。で、ただの木が、今日たとえば一つでも名前を覚えて帰ったら、葉っぱの形とか幹の手触りとかが、その木の名前を言うと思い出せるようになります。そういうのをちゃんと見てあげる。

そういう一本一本の木の触り心地とか、大きさや色を見るっていうのは、逆に私たちも木からきっとそういうふうに見られるんです。木の方でも、ただ小さい人間がワーワー通ったっていうだけじゃなくて、木の肌を触ったり、葉っぱを見上げてると、ああ今日、一所懸命おれのこの辺をなでていったゆいちゃんがいたなとか、きっと木の方でも覚えています。そうやって知りあいの木とかが、たくさん増えていくんですね。

木は何も言わないけれど、木も動物も、なんかこう案外、人って覚えているような気がします。私たちが覚えているのと同じように、向こうもきっと見て覚えてくれてるんだろうと思います。

で、こういう大切な名前を確かめましょう。私は植物や動物の専門家ではないし、ほんとに普通の知識しかなくて、性格は普通以下で、すごく適当な人間なので、何かを聞かれて何でも知ってるっていうことはありません。知ってることは答えられるけど、わからない時はみんなで考えてみましょう。

よく見る

たとえば花ですけど、木とか、ああ今日、水がいっぱいありますね、川に。水もそうですけど、どんな色なんだろう。木の葉っぱの緑にも、いろんな緑があります。水の色もいろんな色、何色もあります。見る場所でも変わります。

それから花だったら、咲いてるのか枯れてるのか、散っているのか、木の葉っぱも枝についているときの葉っぱと、ここから見えている地面の葉っぱの色も違います。だから葉っぱっていうのも、木の上の葉っぱなのか、落ちている葉っぱなのか、あるいは運がよければ、夏なのにこうやって散っているのが見られるかもしれない。そういうことを見る。

あと、花なら花だけが一人で咲いているんじゃないんです。木は木だけで立っているんじゃなくって風が当たるし、水がなければ育たないし、お日さまも当たる。そうすると木とほかのものにはどんな関係があるんだろう。それもまたよく見ることで俳句の世界になります。

そんなふうに一個一個見ていくと、単にきれいな花とか大きな木とか、立派な木とか、そういっただけではもの足りなくなります。なんかこう、その木をもっと自分の中の気持ちで言いたくなります。自分のものにしたくなるっていうのかな。きれいとか、美しいとか、楽しい悲しいとか、そういう直接の、一言で済んじゃう言葉が、もったいなくって使えなくなります。胸の中で何か動いた気持ちをどんなふうに言葉にするかって考え始めると、いま言ったみたいなものが伝わるようになっていくのかなと思います。

じゃあその木が何かに似てないかな、あるいは今日これから見る川の色、流れ方、音とかが、ほかの何かに似てないかな。ぐだぐだ流れているのか、ぱしゃぱしゃなのか、どうどうか、こんなふうに音でいったらどんな音っていうことなんです。

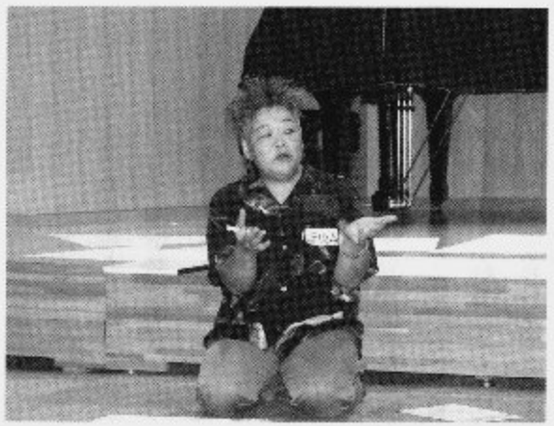
自分を大事にする

そういうことに気をつけながら、やっぱりこう大事に、どんなことを書いても、それぞれの人が書かなければこの世には無かった世界が生まれるのね。木はずっと立ってるよね。何十年も立ってる木だって、この岸にはいっぱいある。だけど、その木がこの川の岸に五十年の間、ずーっと立っていたって、なぎさちゃんが見た今日の木、なぎさちゃんの目で見た木は、なぎさちゃんだけのものなのね。だからそれを俳句にしたときに、今まで誰も言ってなかった木、見たことのない木が生まれるんだよね。書かなければ無かった世界が書くことによって生まれる。だから大切に心を込めて作ってほしいと思います。

そうやって自分以外のものを一所懸命に見て、大事に受け止めて表現しようとするっていうことが自分を大事にするということでもあると思います。自分の目に見えたもの、鼻のかいだもの、耳が聞いたものを大事にして、何を自分は聞いたんだろう、何が見えたんだろう、どんな匂いがしたんだろうって、そういうふうに自分の感覚と自分の内側に注意深くなるっていうことは自分を大事にする最初なのかなって思います。

たくさん書く　たくさん読む

で、たくさん書いてください。一回や二回でシュッシュッとうまくなるものなんて、めったにこの世にはありません。大人になって男女交際を望む時がみんなにもいずれくるでしょう。で、一回や二回で、すてきな恋人ができるなんて、そんなことはない、ぜったいにない。何度もチャレンジして断られたり、自分が全然すてきだと思わない人から好きだって言われて、だれがお前なんかと思ったりします。そんなね、一回や二回でチチチッとうまくいくっていうこと



は、これはどんなことであってもほとんどありません、人生は。

だからめげずに、面倒くさがらずに、作品はいっぱい作ってください。今日もね、作れるだけ作ったら見せてください。そんなふうにたくさん書いて、学校の先生でもいいし、まあ、先生ってわりと話しかけづらいんですよね。なんか面白くって話しかけやすい先生って、そんなにはいないかもしんないけど、ちょっと話をしてもいいと思えるような先生がいたら、見てもらう。それから、おうちの人、こんなん作ったんだよって、あるいは、いくらか信用できそうな友だちがいたら見てもらう。どっか共感できそうなものを持ってる友だち同士で、そうやって書いたものを見せっこするっていうのは面白いと思います。

それから俳句っていうのは、俳句だけに限らないんですけれど、自分ひとりが、ただただ自分の俳句に向き合って、たとえば時間をかけたらうまくなるかっていうと、そんなもんじゃないんですね。そうはいかないんだな。人の作品もたくさん読むこと。お友だちの作った俳句を読むことで、ああ自分はこんなふうには感じないな、こんな言葉づかいはしないなってことに気がつきます。

好きな句を食べちゃう

それから、好きな句っていうのがあったときに、こういう句面白いなって思ったときに、たった十七音の五・七・五ですから、丸ごとパクッと食べちゃってください。覚えちゃってください。好きな句をどんどん食べてお腹の中に入れておく。さっき、バラって言葉を覚えると、その言葉だけで胸の中にバラがよみがえってくる、バラの花の色や形がよみがえってくるっていったけど、俳句の作品も、面白い、いいな、こんな俳句作れるようになりたいなって思うようなのがあったら、パクッてお腹に入れてください。その句を口ずさむと、いつでもその世界を思い出せます。どこへでも持ち運びができます。外国に行っても、それから一人で、たとえば怒られて泣いているときでも、夜眠れないときでも。いつでもどこでもです。

私はけっこう、いじめられっ子だったんで、まあ生意気だっていう要因とか、そのほかいろいろ理由がまざって、シビアないじめをされたりもしてたんだけど、その頃は俳句はそんなに知らなかったけど、詩は好きだったんで、やっぱりつらいときに、好きな詩の一行とかを口ずさむとね、自分が一番好きなものを思い出すと、好きな自分に戻れるんですね。好きな自分を思い出せるんです。いじめられてつらいときって、自分も自分のことを好きじゃなくなっちゃってて、自分の居場所が無くなっちゃったような気がするんだけど、一番好きなものを思い出すと、またこう呼吸ができる。呼吸して、なんか自分自身を思い出せるっていうことがあるんですよね。

そういうつらいときに使える道具、パソコン、好きなゲームとかがみんなにもあると思うんですけれど、道具がなくても電気が通じてないところでも、誰もいなくても、好きなことを丸ごと持ち運びできるのが言葉です。お話だったら全部を丸ごと覚えるのはとても大変なことだけれど、俳句だったら十七音だからね。おいしい、すてき、と思ってパクッとお腹に入れちゃったら誰にも取られない、本当にいつでも取り出せる宝物が体の中に増えていく。そんな感じになると思うので、ぜひ人の俳句もいっぱい読んでほしいと思います。

みんなのなかで俳句が完成

みなさんと同じような小学生、お友だちが書いたものを紹介します。

ペダルふむせなかいっぱい風はしる　小3　伊藤 博城

これは自転車をこいでるとは書いてないのね。まず「ペダルふむ」って、こいでるときの具体的な力とかが書かれています。そして「せなかいっぱい」に「風」が走っている。スピード感、歩いているときには感じない風が十二音のかたまりのなかに書かれてる。

おちばはすみっこがすき　小2　村上 亜美加

落ち葉じゃなくても隅っこが好きな人は、けっこういると思うんだよね。私も喫茶店とか居酒屋とかで真ん中よりは隅っこが好きですね。隅にいてほかのお客さんを観察する、これがすっごい好きなんですけど。で、落ち葉は風のせいでとか、たまたまかわいそうに隅っこに追いやられているのではなくて選んでそこにいる。「すみっこがすき」。

今日は、お母さんとか女性が多くて、男性は少ないんですけれども、お父さんなんかが読むと他人事とは思えないんです。「おちばはすみっこがすき」。お父さんだって好きで家の隅っこにいるんだもん、邪魔にされて隅にいるんじ

やないもんっていうお父さんはいっぱいいると思います。いつかみんながお父さんになったときにそんなことを思うかもしれません。まるごと覚えておいてみてください。

秋空に一番近いきりんの目　　小3　泉　美衣奈

「秋空に一番近い」、ここが引っかかると思います。「秋空に一番近い」ものが何かあるんだよ、この世に。何が近いのって思うと、その答えが「きりんの目」。大きさでいったら、きりんよりも高いところに、たとえば僕たちはビルの上から空を見ることもできるし、きりんよりも高い所に行けるんだよ。だけど、やっぱり自分の足で立って、空に近い感じっていったら、きりんなのかな。

しかも「頭」じゃなくて、「目」っていってる。そうすると秋空があって、その秋空に一番近いところに何がある？「きりんの目」っていうとその目に秋の空が映っているように思えるでしょ。たとえば「秋空に一番近いきりんの頭」、っていったときには頭の形があるんですよね。「耳」っていったら、きりんが空から何かを聞いてるようになります。

「目」だから読んでるみんなは、きりんの目を見ようとするんだよ。読むっていうのは見ようとすることなの。だから「きりんの目」って書かれたときには、みんなが一緒にきりんの目に映った秋の空を見てるんです。具体的に書くってこういうことなのね。

たとえば、これをうんとつまらなくすると、秋の空きりんって背が高いなあなんて話です。いってることはそんなものなんだよ。でも具体的に「目」が出てくるから。あと「きりん」っていう動物ね。

で、その空に雲があるかないかとか、風が吹いているか吹いていないかには、読んだときのみんなの気持ちが反映される。そうやって読み手の中でまた違っていく方向でもあるっていうこと。

次は小学生ではなくって、あそこにいるきみこちゃんの

天の川カバの背を跳び渡りきる　　永井　貴美子

「天の川」って、七夕のときにこうやって星が空にガアーッといって、で「天の川」というものがあります。何がそこで起きるんですかっていうと、カバの背中を跳んで天の川を渡ってしまいました。で、たぶん天の川っていうのは、このくらいじゃなくて、宇宙にこうあるわけだから、渡るためにはものすごい数の無限のカバが必要なんだと思うんだけれど、ものすごい数のカバの背中をこう跳びながら、天の川を渡って向こうへ行ってしまったという。

これは現実にそれを見たということではないんです。でもこの目で見たんじゃなくて、心で見たものも俳句になります。目を閉じて思い出す光景とかあるでしょう。過去のことだけじゃなくて、こんなことができたらいいなっていう想像力って誰のなかにもあるよね。それも作品になります。

最後はまゆみちゃんの句ですが、

お尻から落ちてくる猫桐の花　　水野　真由美

木の上でちゃんと、こう方向転換できないんです。猫がお尻から落ちてくるんだ。飼ってた猫がとろくって、犬に追っかけられたら、ちゃんと降りてこれなくて、ダーッて落ちてきたことがあったんです。「おしりから」で、一応猫のふがいなさ、なさけない格好があって、それはどんな光景ですかっていうと紫の桐の花が咲いている光景です。だからおしりのむこうに紫色の桐の花がみえる。

猫の色は書いてないから、それは読んでるみんなが、三毛猫かな、黒い猫かな、白い猫かなって好きな猫の色と紫色の花を組み合わせてくれれば、今度はみんなのなかで俳句が完成します。

俳句って書いて仕上がった姿だけじゃなくて、読んだ人がそこに何かをつけくわえているんだよね。読んだ人の胸の中で初めて完成するっていうところも、俳句の面白いところなんですね。ぜひそんなことも気をつけながら、やってもらえたらいいなって思います。

夏の川

これで外に、さっき話したように川に行きます。文学館の前の橋から比刀根橋ぐらいまで行って、また戻ってきます。それで私とか、きみこさんとか、文学館のさちよさんとかひろしさんとかが、みなさんが危なくないように文学館の前の車が通っている所では一緒にいます。で、申し訳ないんですけれど、保護者の方々も体調が悪いとか、足腰が痛いとかがなければ、お子さんたちと一緒に少し歩いてください。ご自分のお子さん以外の様子も見ながら動いてください。

みんなも自分より小さい子が、川のそばによったりとか、車が来たりしたら気をつけてあげてください。大人は君た

ちを守ろうとするけど、君たちも誰かを守れるはずだから、お互いそういう意味では危なくないように気をつけて。

そして面白いネタがあったら、独り占めしないでみんなに教えてください。で、こういうものを見つけたよって言いにきてくれたら、それをノートに書きますから。帰ってきたら黒板に書いて、みんなでそれを共有の財産にしましょう。民主主義は大事なことです。わかるね民主主義、なんとなくわかるね。

じゃあ、そういうことで。セミの抜け殻、空蝉は置いておきますから、いじりこわさないように。持つのはいいけどね、見てください。

大人の方々、ご厄介かけますけど、どうぞよろしくお願いいたします。

階段で降りて入り口で一回止まって、いっせいに動きだします。見たものをそれぞれ書けるように、書くものと書かれるものを持って。いいですか。行くよ。

（文学館前の広瀬川詩の道を、朔太郎橋から比刀根橋まで往復しながら、俳句の材料を探します。その様子を一部掲載）

はーい。じゃあこっち側を行きます。

橋です。橋に夏をつけて「夏の橋」という言い方ができます。

「夏の川」で五音なんだけど、「夏川」っていうふうに四音にして、「夏川の」「夏川に」「夏川は」って使うこともできます。それから「もみじ」、まだ赤くならないね。

これがイチョウの木。もう黄色くなっちゃってる子もいます。まだ夏なんだけど、青い葉っぱがあるけど、黄色くなって落っこっちゃった子もいます。

これはエノキ、パッと見たらただの木だけど、この人には榎っていう名前があります。いま千代田町五丁目って呼ばれている前橋の町にも、この木の名前の町がありました。榎町っていう町がありました。

こうやって見たらただの木、で、名前がわかると榎の木。これを夏の俳句の言葉に置き換えて夏榎ともいいます。それから「夏木」「夏の木」ともいいます。ここ一本じゃなくって何本もあって、これを「夏木立」という言い方ができます。木立っていうのは、木が何本かいっしょに立っている感じです。林ほど大きくない。木立はひとかたまりになっているぐらいです。

だから一本の木がいろんな名前を持っている。木であって榎であって夏木であって、夏木立になります。

榎の木にはコケもある。いっしょにコケも生きています。コケもきれいです。あとここに榎の子どももいる。木の下とかにも、落ちている葉っぱやコケがあるからね。っと、桑の実と思われるものがあるぞ。

昔このあたりは、前橋はお蚕を飼ったり、お蚕から糸をひくのがさかんな町でした。だから、ちょっと端に行くと桑畑がいっぱいありました。今は少なくなりました。その桑にはこういう実がなりますね。桑の実、ドドメともいいますが、いろんな色をしています。昨日、濃い色をした熟した実が、食べられるのがあったんですけど、それは私が食べてしまいました。すいません。で、子どもの夏のおやつで、食べると唇が真っ赤になったそうです。私はそんなに飽きるほど食べた経験はないです。昨日食べた結果、これはそんなにおいしくはありませんでした。取りっこはしないように。

ここのもみじは、さっきと違って少し色がもうついていますね。

木にはこの季節、葉っぱがあります。春先に葉っぱが出たばっかりのときは、芽吹きとかいう言い方をします。つぎに新緑、新しい緑っていう言い方があります。緑が濃くなった今の夏の葉っぱを青葉っていいます。青信号の青、緑だけど青。若葉から青葉に変わります。そしてこの緑がどこを見てもいっぱいある、それを万緑っていいます。一万円札の万っていう字に緑って書きます。これは中村草田男っていう俳人が中国の詩から作った言葉なんですけど、万緑って言っただけで夏の木の生命力が、それ一つでわかるような、そういう季語もあります。

夏はこうやって木が茂って木の下が暗くなります。これを木下闇（こしたやみ）っていう言葉があります。木の下の闇です。

もうすぐ、この辺の広瀬川で一番水の音が大きいところへ行きますから、音をいっぱい聞いてください。

はーい。じゃあ先ほどの会場にもどります。

（文学館ホールに戻って、お話を続けます）

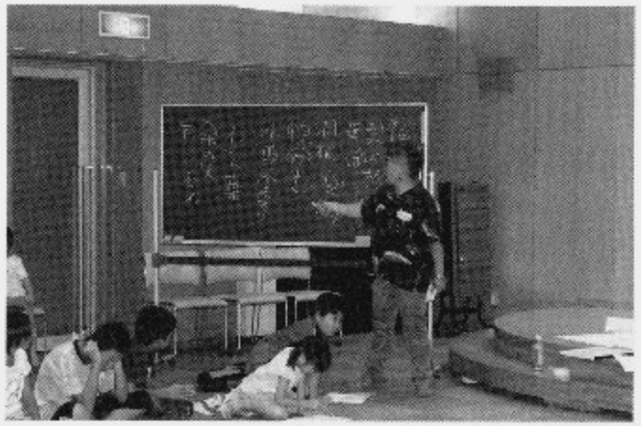
みんなで見つけたもの

なんかおみやげを持ってきた人は、ほかにいないかな。

難しい言葉かもしれないけど、落ち葉の季節じゃないのに葉っぱが木から離れて、ああやって落っこってるのを病葉（わくら）っていうのね。昔、仲宗根美樹の歌がありました。こういうちょっとさびしい感じ、病葉っていうのはね。

皆さんが集めた、採集したものをここに並べました。なんかの羽、黒いのはカラスの羽ね。それからこの病葉ですね。で普通の葉っぱ。これがあったね、桑の実。漢字ではこういうふうに書くけれども桑ですね。ドドメともいいます。ドドメがあってドングリがあって。空蟬っていうのを漢字で書くとこうなります。難しいけどね。え？　カマキリもいたか。つかまえてくればよかったのに。

そのほかに途中で言ったように夏木立とか、夏の空、夏の川いろんなのがあります。ここを出発してから往復の間には階段がありましたよね。だから八川の階段、っていってなんかこうイメージがあるような。あと途中で案内板を、比刀根橋はこっちっていう矢印がついた案内板を見つけた人がいました。それから葉っぱがいっぱいありました。ドングリも、あそこに青いドングリがありますけど、熟して落ちたのもありました。それからカモがいたね。カモは漢字でこんな字。かたかなでもいいです。それから水車がありましたね。いまカマキリがいたっていう話でした。



これがみんなで見つけたものですけど、それ以外にもそれぞれが違うものを見つけたと思います。背の高さも違うし、それから好きなものも違うから。見つけたものはいっぱいあると思うんで、何でもいいです。

どんどん作る

じゃあ、どうしようかな。あと十五分考えてください。できてる人は見せに来てください。見せたあともどんどん作り続けていいですからね。

自分でこれって決めつけないでできたやつ、みんな見せてくれればいいから。

そんなスゴイかっこいいのを見せようと思わなくてもいいです。いきなり名作、持ってこいって言ってないから。今できたのだけ持っといで。

（各自俳句を作り、水野さんに見てもらいます）

今、いっぱい出してくれた人たちもいましたけれど、この二句でいきますよーって二句をこれに書いてください。クレヨンとかマジックもありますから、好きなので書いてください。これと明日、一句作って持ってきてください。合計三句から書く一句を決めましょう。まだその二句を私が選んでない人は見せてください。

今書いてもらっているのは、お名前も書いて出してもらいます。明日お返しします。

（それぞれが、できた俳句を画用紙に書いて提出）

明日のお字書きのときは墨汁を使いますから、汚れてもいい格好でね。

一日目はこれで終了とします。おつかれさまでした。また明日ね。

なお小学生による文中の引用句や作り方などは「上毛新聞　ジュニア俳壇」選者の林桂氏作成、提供の資料を参考にさせて頂いた。記して感謝いたします。

＊本稿は講演録を起こしたものを水野さんに加筆・訂正していただきました。

水野 真由美（みずの まゆみ）

1957年群馬県前橋市生まれ。和光大学人文学部文学科卒業後、同市にて古書店「山猫館書房」を営む。金子兜太に師事。第一句集『陸封譜』（七月堂）により2001年中新田俳句大賞。第二句集『八月の橋』（風の花冠文庫4 鑑の会）。エッセイ集に『猫も歩けば』（山猫館書房）。共著に『座一『俳句空間』新鋭作品集』（弘栄堂書店）、『現代の俳人101』（新書館）、『鑑賞 女性俳句の世界 第四巻』（角川学芸出版）など。現代俳句協会会員。「海程」同人。俳句誌「鑑TATEGAMI」編集人。朝日新聞群馬県版・「上毛俳壇」選者。

受講生の俳句

（一日目に提出した作品・出席順）

青もみじ黄色もみじも仲間だよ　黒崎　まど香
エノキはねコケと一しょに生きている　黒崎　まど香
ざわざわとこわいかわがながれてる　黒崎　匡輝
どんぐりが秋を待てずに落っこちた　吉岡　舜
青空がとてもうれしい夏もみじ　吉岡　舜
なみにまけないいちわのかも　吉岡　藍
きの中は水がいっぱいつめたいな　吉岡　藍
黄色い葉夏なのにもう散っちゃった　阿部　凪紗
ひそんでるひまわりのかげにかまきりが　阿部　凪紗
どんぐりがきせつはずれのごあいさつ　江口　結衣
そらいそげはいくをあそぼにおくれるぞ　江口　結衣
夏川がいっしょに帰ろと波つくる　栗原　正明
知らない木いつの間にかのお友達　栗原　正明
どんぐりはいっこぼうしをかぶってる　宇居　夏実
なつかわやつめたいみずがはしってる　宇居　夏実
エノキのきコケのマントでヒーローだ　笹本　晃聖
イチョウのはせんすみたいにあおぎたい　笹本　晃聖

鴨たちが流されないように泳いでる　川本　和希
くもの巣が光をあびて強くなる　川本　和希
夏風につられておどる広瀬川　津島　百李
エノキの木夏の木いつもそだってる　津島　未玖
夏の川ガワガワいつも元気だな　津島　未玖
桑の実がじゅくすころには夏日和　山川　晋平
空蝉は小さくなった蝉の家　山川　晋平
くるくると水車にだまされ日が回る　山川　依織
木のこけのふわふわベットでねむりたい　山川　依織
せせらぎが虫のたましい流してく　新井　収
どんぐりがぼうしをとってにげてった　新井　収
水しゃがねくるりくるりとまわってる　飯野　咲季
広せ川ザーザーとうなってる　飯野　咲季
なつこだち季節の変わりめ知らせてる　飯野　柚季
せのびしてそよかぜあびたくさはらは　飯野　柚季
ひろせがわみどりのにおいがただようよ　森島　美里
夏の川激しく流れる水の音　森島　美里